

# 人生の最終段階の医療、ケアで講演会

## 在宅療養のメリット解説

### 「もしも手帳」も配布

人生の最終段階における医療やケアについて専門職が解説する「在宅医療を推進するための市民啓発講演会」（横浜市主催）が1月22日、横浜市中区の横浜関内ホールで開かれた。市民の関心の高さを反映し、参加者は約900人に上った。また、市が作成した啓発資料「もしも手帳」の配布と説明も行われた。

講演会では、在宅医、ケアマネジャー、特別養護老人ホーム施設長、看護師、識者が講師となり、在宅療養のメリット・デメリットを解説した。横浜市医師会常任理事で西神奈川ヘルスケアクリニック院長の赤羽重樹さんは、在宅療養は病院での療養に比べ、他の入院者への気遣いが不要、洗面所・トイレを自由に使える、自分の使い慣れたものがそこにある、好きな時間に好きな事ができるなどのメリットが大きいとした。このため、市医師会は市と協働で、在宅医療の相談などに対応する「在宅医療連携拠点」を全区で整備・運営し、在宅医療・介護連携の充実強化を図っていることなども説明した。



市民の関心の高さを反映し約900人が参加した在宅医療講演会  
横浜関内ホール

か、家族が外出できなかったり、徐々に悪くなっていく姿を見続けなくてはならないなど、家族・介護者の責任、負担は大きくなるとした。また、身体機能の衰えの経過

## 関心高く900人参加

「もしも手帳」は、人生の最終段階での医療・ケアについて、元気なうちから考え、家族ら信頼のおける人と話し合う「アドバンス・ケア・プランニング」（ACP、人生会議）を手助けする啓発資料として作成された。横9・5センチ、縦13センチ、見開き8ページ、お薬手帳用ケースとセットになり、携帯することで気軽に話しやすいようにしている。市内の薬局などで5万部配布している。

手帳には、「治療・ケアの希望」「代理者（誰に医療・介護従事者と話し合ってほしいか）の希望」「最期を迎える場所の希望」の三つの質問があり、選択肢をチェックする。治療・ケアの選択肢には、「できるだけ長く生きるための治療を受けたい」「痛みやつらさを軽減する治療やケアのみをしてほしい」「すべての治療やケアを受けたくない」「わからない」「その他（自由記載）」の五つが記載されている。

人生の最終段階における医療・ケアについては、個人の尊厳や生活の質を無視した延命治療はしてほしくないという意見も多くなっている。自らが判断能力を失った際に、自分に行われる医療行為に対する意向を前もって意思表示する「事前指示書」「リビング・ウ

ことが説明された。がんの場合、身体機能は高いレベルで安定した状態が続き、亡くなる前の1〜2カ月で急速に悪化する。この時の在宅医療は、病院の緩和ケア病棟での医療とほぼ同じことができ、在宅療養のデメリットは少ないという。

一方、心不全・呼吸不全の場合、認知症・神経難病・老衰の場合は、それぞれ異なる経過をたどり、がんと比べ、病院や介護施設での療養のメリットが大きくなくなることが示された。

### 話し合いの契機に

「イル」への関心も高まっている。しかし一方、この問題を医療保険財政や医療費の問題と関連付け、個人の尊厳や生命を軽視するような言説も出て、重大な懸念も生じている。生死について、宗教的、哲学的、倫理的な認識を深める必要が生じている。

手帳の検討にあたった「横浜市民人生の最終段階の医療等に関する検討会」の座長で横浜市大総合診療医学准教授の目下部明彦さんは「もしも手帳は事前指示書ではなく、考え、話し合うためのきっかけとするもの。死を考へることは、より良き生を考へることにもなる」と話している。

医療・ケアについての

### もしも手帳

「もしも」  
治らない病気などになったら

「もしも」  
自分の気持ちを伝えられなくなったら

あなたはどうかやって気持ちを伝えませんか？  
この手帳は「もしも」に備えて、元気なうちに、治療やケアについて、いま思っていることを話しておくものです。  
あなたのご家族や大切な人と一緒に話し合ってみてください。

横浜市立中央総合病院の医師会に贈る検討会  
発行済品

区民サービスセンター

もしも手帳の表紙